

直心

苦海に沈淪する者

京極 逸藏

一。苦しい時の神だのみといふと、何だか

輕蔑すべきだけのこのやうに思ふが、よく考へて見るとこの諺ほど痛切端的に求道心の発動する相を表現したものはあるまい。苦の自覚こそ道に入る出発点なのである。

釈尊は四門出遊の苦觀より出家せられ成道の後、四諦の理を説くに當り、苦諦を第一において、先づ人生は苦そのものであることを知れと教へられた。キリストが富貴者の天国に入るは駱駝が針の孔を通るよりも難しと説かれたのも、貧より起る種々の苦悩こそ學道の基なることを示し、順境にありて苦難を知らぬ富貴者の求道難を示されしものと思ふ。

一。釈尊は生老病死の四苦に、  
 愛別離苦、  
 求不得苦、  
 怨憎会苦、  
 五盛盛苦

愛する者に生別し死別する苦。  
 欲しいものが得られない苦。  
 憎み嫌ふ人と共に生活せねばならぬ苦。  
 身心が元氣をさるるために起る苦。

の四つを加へ、所謂四苦八苦が人生の現実の相であると教へられた。かかるに我等は苦を厭い樂を願ふ余りに、この現実を凝視するは黒心の正視することさへないが常で

ある。その油断しこる所へ豫期せざる大きな苦難が襲ふとくる。大狼狽の果が「苦しい時の神だのみ」となるのである。吾人はこの人生が何時も苦難に充ち満ちてゐるのだといふ動かな事實を先づ正しく明かに知らなくてはならない。これが求道の第一歩であり、學道の第一階程である。

一。人生は苦悩の里である。殊に在米日系人の現実は真に苦海に沈淪する者といふべきである。東部に轉住した或る二世から最近貰った手紙の一節に、

在米日本民族にとつてこの第二世界大戦は今迄にない辛い苦難を経験させられ、  
 まいたが特に第二世にとつては不安と焦燥の中に立たされた感が致します。

キャンフに、それこそ一私変つた共同生活をして居る人々、排日の中に轉住して新しく生活を切り開いて行かうとする人々、又特に兵にとられ又は志願して生死を賭して戦に臨もうとする人々にとつて、

実に一寸先は分らない不安だらけの生活です。たい本當に宗教に依つてのみこの不安が静まり安心が得られるのではないでせうか。とあつた。

若い人達の苦悩をありのままに物語つておると思ふ。しかし、かかる苦難は一世にとつて、もつと痛切に感ぜられおるのではなからうか。不馴れた集團生活を強いられて、不自然な共同生活の渦中にあるセンターの在住者にも、言語風俗を共に

する未地の自由区域への轉住者にも同と苦  
惱が味はれおるのではなからうか。憂する  
者と別れの生活から来る愛別離苦。

たい生きて行けるだけで求むるもの、喫へられ  
ない、求不得苦、辟土一重がかとなりといふ  
生活から来<sup>キ</sup>がちの怨憎會苦、精力のはか  
し場に苦も五蘊盛苦、いづれも皆、殊  
にセンターの生活等特色づけておないだらうか。  
一。一種変った共同生活と、先の手紙にあ  
るセンター在住者の、大きな悩み一つに  
年少子女の将来に關するものがある。

幼いものに團かしてならない言葉が、話が  
容赦なく彼等耳に入る。かくて無邪気な  
童心に拭ふことの出来ぬ活臭が印せられる。  
余り外に出歩かない私にさへ色々な悲しい  
話が聞えてくる。あたらしいマツプをしぼつ  
てゐると、四五才位の少女が

「おばさん、それどこでかつはらつて  
来たの？」

と向ふたといふ話もその一つであつた。何  
か新しい気の利いた物さへ見ればかつはら  
て来たものだと思ふ無邪気に決めてゐるこの少  
女の行末を考へるだけでも頭が重くなる。

こんな環境の中に成長して行く愛子の將  
来を思ふ親たちは、何等かの形で愛兒  
保護聯盟でも作つて、わが子を守るべき  
であり、幼少年者を有<sup>も</sup>たない老人たちも  
之と協調して無責任な言動を控ゆべきで  
あると思ふ。

一。一母の有するいま一つの大きな苦惱は

(第二ページ)

相對立せる陣營にその愛兒を送らねば  
ならぬ親の慘苦である。多くの道友  
の子弟が入學したと傳<sup>ツ</sup>へられてくる。

長いこと女の子ばかりもつたのであつたが  
最後に二人の男の子が生れた。文字通り  
掌中の玉と愛育せられたその愛兒が今  
は二人とも入學したと告げる友。

大学を卒業して水産業を継ぎ、眞面目に  
事業を経営してゐる長男を伊太利に送つて  
ゐる友。

独り子を戰場に送つて日夜にその消息を  
待ちわびてゐる老父母。それ、事  
情は違ふけれど諦め切れぬ苦惱の中に日々  
を送つて居られることは皆のじである。

一。開戦以後、間もなくインタンせんれ二年  
有余の受難生活の後、センターの家族の許  
に歸られた一道友の近信の一節に、

「長男も次男も二人ともインダクションはす  
みました。いづれ近い中に口集まる事と存  
じます。非常時に際会すれば困難に當ること  
は彼等の義務、親としても當然の覚悟です。

唯其の間に待遇、相違で女々しい口實を見  
出す丈け。佛教に説かれてある、水に果る  
も山に果るも是れ生れ乍らの運命、

堂々と大道を活歩せよと勇<sup>わ</sup>励<sup>カ</sup>ま<sup>り</sup>て居  
ります。今日まで受けた虐待上、親として  
断腸の思ひですが是等の犠牲捨石も何時か  
は世界人類の光明となること、信じて置<sup>カ</sup>け  
心に鞭<sup>ムチ</sup>つて、諭<sup>カ</sup>し又慰めて居ります。此の

センターでも十人十色区々の意見です。

手紙のつききり 忌避者も續々出て居りま

す。斯く書綴りやすと何となく自分の心が恥かしく感じます此位で止めます。B

とあった。愛兒を對立せる陣營に送りねばならぬ親の心持が遺憾なく表はされてゐる。米国人として生きた我が子がその國難に殉ずるのは當然のことく

理智の上では充分に得心出来るけれども、親自身の敵性外人たる現実を考ふる時

情の上でどうしても割切れないもの潜在する事がハッキリと感ぜられる。この諦め

ても諦めでも、あとからと出て来る複雑なものこそ在米日本人が受けねばならぬ苦難である。

一。戦線にある青年佛教徒に送る英文メッセージを一日も早く手許に届くやうに、特にエヤーメールで出してゐると、或る出征

兵士の母に語った如く、先生、子どもに送る小包を作る時は、どうか生きてゐてこれを受取つてくれるやうにといふ思で胸がいはいです。B

と打ち明けられて、自分の余裕のある心が今更恥しくなつた。伊太利で負傷した一兵士の母に私のメッセージが戦地の病院に届く筈であるからと言つた時、まだ詳細を受けとれないその母は言下に、

先生、目が見えておくれ、はよろこびますか。B

と返事せられて親の念心の深さに泣かされたことである。

(第第三。ページ)

一、各地の戦線に散華せられた日系兵士が五十名に近いことである。豫て覚悟のこと、はいいながら、この萬一の場合がどうか

その愛するもの、上に来ないやうにと日し夜し念じて居られた両親、妻子、兄妹の悲痛は到底私の想像をしのぐ事である。

たい共に涙する外はない。日支事変歌集戦地篇にあつた。戦死せし若き兵士の背當表に土産の品もこのへてあり。この一首を憶い出す。伊太利から南洋から、今は形見となった品々が帰つた時の遺族の新なる涙をおもふ。一。かゝる愛別離の苦悩に直面せる人は勿論起居を共にしてその苦悩を目前に見る凡ての人々は、各々自分の沈淪してゐるこの苦海を如実に反省し、如何にしてその苦悩を脱す可きかと熟慮しなければならぬ。佛は因果理法を説いて私共の現に受けとめる事は全部、自分が過去に作つた業の現れであつて、決して自分以外の者の所為ではないと教へられた。或る兵士がその親に、若し自分が年でも日本に行き居て直接に日本を理解して居たら私の考は変わったかも知れないが私の日本は両親を通じての間接のものにすぎない。私は今日まで米国人として育てられて来たので、其の國の爲に命をたらざるを得ません。どうかこの不孝の罪を容して下さい。と言つた時に、私たちは今少し

したらとはかり思つて、うっかりと今まで

この国に在留してゐて、我が子にこの氣の

毒なおもひをさせてゐるこの親の愚心さの

現水に泣いて、居りますと告白せられた

が、多くの親がその過去を靜かに疑

視反省せられる時に必ずこの一兵士の

親と同じ氣持で自分の業の現水に今更

驚くと共に、氣の毒なわが子よ、といふ

思ひで、子に詫言すには居られまいと

思ふ。この反省と懺悔とによつて始め

て私共の苦惱が少いづ、癒やされぬ。

一、しかし愚かな私共はかうして道理の上

から理智の上からは一應成程と得心す

ることが出来るけれども、其のあとから

と滲み出てくる諦め切れぬ情の悩は如何

ともすることが出来ないものである。

因果の理法も、自分の業に数糸がれてゐる

身であることも、よく承知して居り乍ら

愚痴の根がどうしても断ち切れぬ。

諦めやうと努むれば、奴らむるほど、いよいよ

諦め切れぬ自分の眞實の相が判然と知ら

れてくる。この始末のつかない愚心知こそ私の

眞實の地金なのである。私の久遠の姿なの

である。今、やうとかすかながら知られて来た

この自分の眞實を永劫の昔から知りぬいて待

めて下さる御親の御ますことが、不思議やこの

自分の愚心知を通じ罪業を通じて初めて

分からせてもらひ知うして頂くことが出来る。

南無阿彌陀佛の救済の白道は、

苦海に沈淪して泣き叫ばずに居られぬ哀

れな愚かなこの自分の胸のたい中を貫かれ

てゐるものである。有限の小さな理智で、如何

することも出来ないこの自分を照破し給ふ

佛智が、信心の智慧と現して下さることに

よつて、眞實の諦めの世界に入らせて頂くの

である。かくて苦惱の人生は急転直下歎

喜法悦の世思と変つて来るのである。

佛法は心のつまるものかとおもへば

信心に御なぐさみ候

(一代記附書四十六)

この蓮如上人の内言甚まはこの間の消息

を示されたものと思ふ。

世人動もすれば佛教を厭世悲觀の教

と誤るのは、此の徹底的苦觀の表面のみ

を見て下さる速断である。多くの人が出来る

ことなら迴避したいと、わざと見ないやうに

過してゐる人生の現實を凝視して、計りな

き苦惱の底に思ひがけざる、汲めども

つきぬ法悦の白水を見出し、無盡の歡喜

に生き甲斐ある生活の現成を示すもの

こそ佛教である。

一、かく味い來つて第二世界大戰に際し

一番苦境にあかれてゐる在米日系人こそ、

その受難を通じて苦惱を通じて信仰に生

きる至上の機縁を興へられ、道心を培ふ最

勝の道場にあることに氣附いて世間のこと

が出来ぬ。旧詠一首を録しこの稿を誌したい。

はかりなき愚心知のすかたぞ尊ぶとけれ

智慧光佛の御座に、あれは。

△遠征の愛見

一兵士の母

次の歌はもと日本の或雑誌に出てお  
たものらしいのです。北米大陸の一人の母か  
ら、南洋の戦線にゐる愛見に此の歌  
が送られました。それを他の兵士が讀ん  
で感激のあまりその寫しをこちらウの

慈母への便りに回封し來ました。この  
三人の母は互に相知らないのです。  
日本から北米、北米から南洋、南洋  
からまた北米へと同一念佛の親子  
の間に転じ來った尊い跡を偲び乍ら  
茲に轉載いたします。歌の題は私が  
假りにつけたものです。(末極ま)

(一) そなたは遠く大陸に、母は大和の奈  
良の里、道はいかほどへだつとも眺める  
月は同じこと、月に変わりがない限り  
同じ光の中に住む。

(二) そなたの称<sup>よ</sup>へる念佛も、母の喜ぶ  
念佛も、み親に変わりがない限り同じ  
お慈悲の中に住む、一人さみしく思  
ふなよ、かゆにそなたにつきまとう。

(三) 夜の寢覚めもうつにも、慈悲のみ親  
と二人づれ、君に忠義が親孝行  
お国の大事と思ふなり、いざ戦いの  
その時はあとに心を残さず。

(四) 立派な手柄してかくれ、一死なば浄土  
の親の里、飛び來る彈丸なむあみだ、  
諸佛菩薩の迎へにて笠<sup>シヤク</sup>ひちりき

第五ペーシ

の音楽と思へば心も勇み立つ。

(五) 此世で會へぬその時は極樂浄土で  
あいませう、親子兄弟手を引い  
て生きて念佛となへつ、力の限り

御奉公

君恩 おもふて  
暮しませう。

(オハリ)

△トリーブズ便り

一。秋涼の好季節となりました。  
道友諸兄弟には元気で一層念  
佛の道においそしめ下されん事を念じ  
ます。私も大分元氣になりまゝか  
未だ半病人の域を脱しません。  
直心と英文メッセジを毎月一回宛出し  
たいと思ひ乍ら精力が續きません。  
余り無理をして倒れとも思つて控  
へて居ります。豫定通りにおせない  
ことを祈り下さい。

二。ほんの手紙代りにと、心を始めた

二つのプリントが比呂橋の協カにより  
意外に成長した。英文メッ

セジ第三輯約二千通郵送差し  
ました。今度の直心第三号も二千

部印刷のつもりです。郵送千余部  
パス配布三百各センター病院へは  
人。私の市見舞として五十部は頒布  
されず。これ等三千余の郵送リテ

の教正理が目下手のかかる仕事で、これ  
がずれば余程樂になりませう。氣候が  
よくなるのと両方豫定通り出せるやうに  
なると思ひます。

合吉